

自分の顔を文章で描写する。

自分をもう一人の自分が外側から見るように、客観的な目を持つこと。
これがよい文章を書く秘訣です。

今回は、手鏡に映る自分の顔を、わかりやすい文章で表現する「自分スケッチ」を例に、
深みのある描写の仕方についてご紹介いただきました。

今年二月六日の朝日新聞朝刊に「自分スケッチ」の話が載っていた。作家・あさのあつきさんが、中学生相手に特別授業を行った時のことを記事にしたものだ。

生徒たちは、真新しいノートに自分の顔を姿を紹介する文字を並べる。たとえば「色が白い」「鼻の横にニキビ」「髪がカールしている」「ほっぺが赤い」「恥ずかしがりや」などと「自分紹介」の文章を書いてゆく。

その調子で、今度は友人のスケッチをし、最後は手鏡をのぞきながら本格的な「自分スケッチ」の言葉を書く。「中学生は自分とは何かを考え始める時期です。自分スケッチをとつかりに、半歩でも進んでもらいたい。鏡に映る自分を見て、知らなかった自分を見つけた人もいるんじゃないか」とあさのさんはいい、さらに「このノートを保存し、十八歳とか二十歳とか、節目の時にまた自分スケッチをすると面白い」ともいつていた。

早速、手鏡を持ち出し、私も「自分スケッチ」というのをしてみた。なんとというつまらない顔だと思う。驚いたのは、あきれられるほどの皺の深さ、多さだ。しかも目の下のたるみすごい。眉間の三本筋などは、よくもまあ、こんな深い皺をせつせと刻み付

けたものだと思う。あわてて、顔のあちこちの皺を指でのぼそうとしている自分がおかしかった。

「自分スケッチ」の試みで学ぶことがいくつもあった。

①時々、「自分スケッチ」をノートに書き、そのノートは保存しておく。さらに肉親や友人の顔、鏡を見て、印象を文章にしておく。これを繰り返し、ノートに書き込む作業を続けられれば、描写力をつけるいい勉強になることは間違いない。

②書くたびに変化する己や友人の顔をよく観察することは、自己発見、人間発見の道につながる。

③「自分スケッチ」で、己を深く掘り下げる方法に習熟すれば、他人の顔を姿を描写する場合も、その方法を駆使して、他人の顔、姿の、深みのある描写への道が開ける。

◎

「作文の秘訣」について作家井上ひさしの名言がある。それは「一言でいえば、自分にしか書けないことを、だれにでもわかる文章で書く」ことだ、と。「自分にしか書けないこと」を書くのは容易な

ようで、実は難物なのだ。難しいけれども、自分の顔や姿を文章で表現することは、「自分にしか書けない」文章をめざすための近道の一つだろう。

坐禅の坐という字は、土の上に二人の間が坐るさまだという話がある。自分を、もう一人の自分が外側から見ることで、はじめて、普段は気づかない本質的な部分が見えてくるという意味だ。

ついでに言えば、文章を推敲する時は、書き手の自分が、読み手の側になりきって読む。そうすると書き手本人が気づかない己の文章のアラが見えてくる。

●たつの・かずお

朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。

